日本口承文芸学会 会報

伝文

<伝え> 第16号　　1995年1月

発行　日本口承文芸学会
〒192-03　東京都八王子市南大沢1－1
東京都立大学　中国文学研究室気付
☎ 0426-77-2145　FAX. 0426-77-2150

クコ゜アイヌ

萩中　美枝

大江健三郎氏が、知里真志保の著作を「名著発掘『アイヌ語入門』」と題し、「怒りの声の背後から悲しみの声も聞こえ……」と書いたことがある。(『文芸』1964)

知里は、この書で「アイヌ研究を正しい軌道にのせるために！」とゴシックにして、著名な研究者やアイヌの古老などの好い加減さを、いちいち例をあげて批判した。その余りの鋭さに、版元も出版をためらったらしく、知里から難産しているという手紙を貰った。

１９５６年、ようやく出版されたが、その直後から批判の対象になった人たちから抗議され、もめ事が続いた。「いままでのアイヌ研究の成果を無視するような本を出版した出版社の態度にも割切れぬものがある」と新聞にも出て、版元は表紙を色分けして訂正文を添付するなどの対策に苦慮した。

書評の中に「自信満々と批判している」(北海道新聞 1956.7.1) というのがあった。 知里にとってこれほどの侮辱はあるまい。駆け出しの頃はともかく、研究者は他人の書を自信満々と批判したりはしない。推敲すればするほど先があることを知らされる。知里も「われわれの書く論文は何度書き直しても定稿などというものは、ついにあり得よう道理もない」と書いている。(「室蘭市旧地名考」1960)

『アイヌ語入門』が出版されて間もなく、知里は 週間読売 で近藤日出造に、「学問に向かうとアイヌ意識がなくなるんです…… ぼくは 人間であり、だれでも人間だと思っています」と言う。彼は、そう言わなければならないほどのアイヌであった。

ちなみに、アイヌ語のアイヌ aynu は、神に対しては人間、女に対する男の意味を表わす。妻がクコ゜アイヌ ku-kor-aynu(わたしのアイヌ)と言えば夫のことをさす。私のアイヌ知里とは『アイヌ語入門』の出た年に婚姻を結ぶことになった。

それから３９年たつ。「アイヌやアイヌ語に関するかぎり、どんな放言をしても責任を負わなくてもすんだというような悪弊は、この辺で根絶しておきたいと思った」知里の悲願は叶えられたであろうか。「そういう私の気持は、この本を読んだ若い人々には恐らく察していただける」という彼の言葉を、そのまま若い人たちに伝えたい。

１９９４年に北海道立アイヌ民族文化研究センターが開設された。そこでは和人もアイヌも同じ土俵で取組んでいる。フィールドに出て「沈黙の辛い時間が流れ……古老の苦悩が伝わる」という経験をした (広報紙 vol.1) 若いアイヌも札幌の大会で発表する筈である。　　(北海道)

１９９５年度　口承文芸学会 札幌大会のご案内

とき；　１９９５年６月 ３日(土)・４日(日)　　〔３日は午後から開会の予定です〕
場所；　北海道大学 (札幌市)　〔高橋宣勝氏のお骨折りで、会場をご提供いただきました〕
内容；　研究発表・シンポジウム等　〔詳細は未定。後日、大会案内をお送りいたします〕
発表者募集；　別紙案内の通り、研究発表の希望者を募っています。アイヌ口承文芸に関する研究発表はもちろん、一般の研究発表も歓迎致します。奮ってお申込み下さい。

《外国通信》

メルヒェンの旅

間宮史子

昨夏、小澤俊夫氏が主宰する昔ばなし大学の「メルヒェンの旅」に同行し、グリム兄弟とそのメルヒェンの世界をたどってドイツ、オーストリアを旅した。

ねずみ捕り男の伝説で知られる、北ドイツの町ハーメルンから出発し、グリム兄弟ゆかりの地を南下していく。兄弟が１８３７年まで大学教授としてつとめ、ドイツ民俗学の礎を築いた大学町ゲッティンゲンでは、民俗学研究所内の『メルヒェン百科事典』編集局を訪れ、迎えてくれたウーター博士の説明を聞く。カッセルのグリム兄弟博物館を見学し、兄弟が大学生活を送ったマールブルクへ。民俗学者ヘック博士の案内で、赤ずきんの里といわれる、マールブルク近郊のシュヴァルムを訪れ、農家や、めずらしく今でも使われているパン焼き小屋を見学する。私達は、ちょうどある一家がパンを焼いているところに行きあわせたので、こねたパンが木のへらにのせられ焼き釜の中へ入れられる様子をじっくりと観察した。この地方出身の画家ウベローデは、『グリム童話』のさし絵に、マールブルクや近郊の村々の風景や建造物を好んでとりいれた。ウベローデがモデルにした実在の、「ラプンツェル」の塔や、「がちょう番の娘」の馬ファラダの首がかけられた門などを見て歩く。マーブルクではまた、当時のグリム兄弟の下宿から、彼らが決定的な影響を受け、毎晩のように通ったという師サヴィニー先生の家までの坂道を実際に歩いてみる。私はすでに何回かこの道を歩く機会に恵まれたが、グリム兄弟がどんな思いでここを行き来したのかを考えるたびに、感動するのである。その後、兄弟が子ども時代を過ごした村シュタイナウで、当時の住まいやシュタイナウ城のグリム展示室などを見て、兄弟の銅像が立つ生誕地ハーナウへ。

旅の参加者たちは特に、ドイツの森の中を歩いたり、山上の牧場にのぼったり、お城の中庭に立ったり、村のパン焼き小屋を見たりということによって、グリムのメルヒェンの世界をよりいっそう実感できたという。（東京都）

理事選挙のお知らせ

別紙案内の通り、１９９５、６年度の理事選挙が行われます。

期日までに投票をお済ませください。

《こえ》

ＣＤ昔話資料について

中村とも子

１９９２年から、茨城県日立市が昔話のＣＤ資料の発行を始めている。総監修者に小澤俊夫氏を迎え、『笠原政雄昔話集』（'92年）『鈴木サツ昔話集』（'93年）『昔話採集家佐々木徳夫選 みちのく昔話集』（'94年）の３シリーズ（いずれも13巻仕立）が発行されている。ＣＤ資料の編集実務にたずさわっている立場から、その内容や意義などについて報告したい。

従来、昔話は文字資料の発行が主流を占め、音声資料として発行されることは極めて希であった。口で語り、耳で聞くという音の文芸の本質からみれば、この度のＣＤ資料シリーズの発行は、昔話研究に新たな側面を拓くものとして期待できよう。現在発行されているシリーズは、語り手個人の全レパートリーを納めたものが故笠原政雄さんと鈴木サツさんの昔話集である。佐々木徳夫氏の選によるＣＤは複数の語り手の話を納めている。オリジナルテープの中には昭和40年代の録音もあり、かなり古い録音も再生できる。

かつて、昔話先進国という言葉もあったほど豊かな語りを伝承する語り手たちが存在したわが国でも、最近は語り手の高齢化や物故が進んでいる。アナログテープで録音された語りも、年数を経れば音が消滅してしまう。このような状況下では、伝承の語りを現在の先端技術で保存しておくことは急務であろう。

また、オリジナル録音を復元することによって、語り手と聞き手（調査者）のあいだに通うものがかいま見えたり、語り手が話を聞かせてくれた人（親や身内）に対する追慕の思いを吐露しているのを発見できる。語りの場に臨場すること、例え、それが二次的なものだとしても、私たちは二つの時間の流れの中に身を置くことができる。一つは、語られる話そのものの時間、もう一つは、調査者と語り手と共有した時間である。その二つの時間の流れを追体験することで、話をじっくり語ること、聞くことは、語り手と聞き手の双方が相手に対して心を開かなければ成立しないのだと悟る。

日立市は、今後もＣＤ資料の発行を続けてゆく方針である。多くの語りが復元されることを願ってやまない。（東京都）

【ＣＤ資料の問合せ先】

（財）日立市科学文化情報財団

〔☎０２９４（２４）７７１１〕

語りの場の復権 — 第2回全日本語りの祭り —

武田　正

昨秋10月15・16・17日、山形県南陽市の夕鶴の里を中心に、南陽市と語り手たちの会・民話と文学の会をはじめ多くの会の協賛によって開催された。その華やかさは東北地方をはじめ、全国各地からお集まりいただいた昔話の素語りは現代の語り手の代表とも言える福島県会津の馬場タニさん、宮城県小牛田の只野とよさんの語り、それを迎えての地元山形の語り手の語りなど、多彩な語りが花咲いた3日間でもあったことに明瞭であったが、その語りを踏まえての3つの分科会の参会者の熱気あふれた討論で、皆頬を赤らめて意見を述べ合ったことにも、よく現われていたということができよう。

第1分科会「現代の語り」では、ここ数年注目を浴びているアメリカのジョーンズボロでのストーリーテリング・フェスティバルの紹介などを含めて、「語りの今」を論じながら、昔話にとどまらない＜語り＞の世界の所在を論じ合い、祖先と子孫の接点としての自分が何を子孫に語るかと共に、語りの世界の領域がかくも広大なものであることを論じたのである。研究の分野としては「世間話」と伝承の関係の問題へ発展する可能性を、具体的な語りを通して認識させたものと言える。

第2分科会の「見せて語る」では、語りの座の変質を受容せざるを得ない現在、「語り」の語り手と聞き手のかかわり方も大きく変質しつつあることは論を待たない。その意味で新しいメディアへの目を開いて行かなければならない。かつての幼児への読み聞かせがそれであったし、さらに紙芝居やパネル・シアター、児童劇などにも関心を持って行かねばならない。とは言え、昔話はあくまで語り手と聞き手が心の交流を通しての「世界」を協同で創って行くことである筈とすれば、どう新しいメディアに両者が参加するかこそ、解決しなければならない問題であるということを、参会者が語り合ったものである。

第3分科会の「民話の語り」では、地元山形のすぐれた語りを十分堪能すると共に、なぜ今語りをしなければならないかが語り合われた。もちろん、すぐれた語り手の語りの巧みな「間」の問題とか、方言をどうするかといった技術的な問題もあろうが、民話の中に語り手が込めようとした「もの」が何であったかをこそ、今から語りをもって、子どもたちの文化創造に参加しようとする多くの方々の第一の問題なのではないかという発言は、多大の感銘を与えたものである。素朴な語りの中に入り込んでいる「祖先の、現代のわれわれへのメッセージ」とは何か、それを文字として翻刻された資料から分析・析出する研究は従来もなされ、今後も研究の対象たるべきことは当然であるが、それにとどまらず、「語り」そのものからも析出して明確化して行かねばならないのではないかを、端正な語り手の語りの中で教えられたことであった。

昔話に限って見ても、「伝承の場」の変化はあまりに著しいものがある。柳田国男は日本人の固有信仰を追い求めるために、固有信仰を含んだ神話を、その神話の零落したものとしての昔話を見ようとした。現実に収集された昔話からさかのぼって、神話時代を、さらに固有信仰を見ようとしたが、昔話の研究に、少くとも未来を見る目も必要であり、過去から現在への「零落」という視点でなく、私は過去・現在・未来を成長として捉える視点を語りの祭りの中で学んだと言っていい。　（山形県）

《10月例会報告》　テーマ：中世の「はなし」

常光　徹

10月15日、中央大学駿河台記念館で、石井正己氏の「芸能空間の語り — 能と伝説」と、徳田和夫氏の「異形の街談巷説」という二つの研究発表があった。

石井氏は、柳田国男の「伝説」の概念について綿密な検討を行ない、「伝説」という新語を柳田が採用した経緯をたどりながら、それが、かつての「イワレ」「因縁」「故事」「言い伝え」といった言葉と連続性をもつ点を重視した。ついで、能の語りを語り手という視点から大きく、シテの語り、ワキの語り、アイの語りに分け、それぞれの特色、たとえばアイの語りであれば、現実に生きていてその場所のことをよく知る者、つまり、その土地の伝承者としての性格を帯びているという点などを指摘し、さらに、夢幻能と現在能のちがいを、語りの場と語りの内容の関係から説いた。能の語りに「謂れ」「来歴」「子細」など起源譚を内容とする傾向のみられるのは「かつての伝説」との共通性を物語るものであり、また、作り物は伝説における記念物の機能をはたしているという。口承文芸としての能の研究の可能性を問う示唆に富む発表だった。

徳田氏は、中世における奇事異聞や妖怪譚を日記等をもとに紹介し、うわさ話の伝播者や社会的な背景について述べた。『徒然草』第五十段には、都に鬼が出没するというううわさがたって大騒ぎをしたという話がみえているが、類似の話は『経覚私要鈔』『言国卿記』『御法興院記』などにも記載があり、

話を比較することで新たな事実や当時の世相が見えてくるという。そのほか、狸が化ける話、大食の男の話、もの言う魚などを取り上げ、今日の伝承との関係を指摘した。近年世間話に対する関心が高まりつつあるが、今回のようにある時代に視点を据えた研究は少ない。それだけに、個々の資料の紹介とそこから広がる説話の世界には興味の尽きないものがあった。（埼玉県）

受贈書リスト

Directory of Asian Historical Studies in Japan 1992 日本におけるアジア歴史研究者名簿 1992 ユネスコ東アジア文化研究センター 93
国文学研究資料館報 41～43号 93.9～94.9
国立歴史民俗博物館研究報告集 54集 93.11
民具マンスリー 26巻9～12号,27巻1～7号 神奈川大学日本常民文化研究所 93.12～94.10
日本学術会議月報 34巻12号,35巻1～12号 日本学術会議広報委員会 93.12～94.12
真澄遊覧記研究通信 2～6号 真澄遊覧記研究会 93.12～94.8
同志社国文学 39～41号 同志社大学国文学会 93.12～94.11
北の語り 北海道口承文芸資料 8号 北海道口承文芸研究会 94.1
沖縄国際大学文学部紀要(国文学篇) 22巻1号 94.1
奈良県立民俗博物館だより 20巻2,3号 94.1,3
日本民話の会通信 111～116号 94.1～11
日本民俗学 197～199号 日本民俗学会 94.2～8
甲南国文 41号 甲南女子大学国文学会 94.3
国文学研究資料館講演集 15 西鶴－没後三百年－ 同館整理閲覧部参考室編 94.3
高校生が語る現代民話(その２)〔研究集録「おおつま」７号抜刷〕 久保孝夫編 函館大妻高等学校 94.3
多摩市の民俗(衣・食・住) 多摩市叢書9 多摩市史編集委員会編 多摩市 94.3
日和佐町昔話集 大谷女子大学説話文学研究会 94.4
函館昔話 ６号 函館パルス企画 94.4
神奈川大学日本常民文化研究所要覧１９９４ 同研究所 94.4
国文学研究資料館平成５年度共同研究報告書 同資料館 94.6
聴く語る創る ２号 特集 津軽の民話 佐々木達司編著 日本民話の会 94.7
近松研究所紀要 第５号 園田学園女子大学近松研究所 94.7
グリムのメルヒェン ― その夢と現実 野田芳子著 勁草書房 94.8
歴史と民俗 神奈川大学常民文化研究所論集11 平凡社 94.8
津軽の民話 第９号 津軽民話の会 94.10
アイヌ民族文化研究センターだより vol.1 北海道立アイヌ民族文化研究センター 94.10
泉靖一伝 ― アンデスから済州島へ 藤本英夫著 平凡社 94.11
改定名瀬市誌編纂委員会資料集(二)基家・慶家文書 94

＊ありがとうございました。今後とも御協力下さい。

事務局報告

【訃報】水沢謙一氏('94.7.2) ご冥福をお祈り申し上げます。
【新入会員】『伝え』14号掲載分以降に会員になられた方です。

加藤雍子 〒664 大阪府伊丹市船原2-6-16
中村利一 〒171 豊島区池袋2-14-4
如月六日 〒320 宇都宮市鶴田町431-78
出水慈子 〒152 目黒区目黒本町5-26-9-205
渡辺一弘 〒880 宮崎市大塚台東2-4-9
伊香祝子 〒300-12 茨城県牛久市牛久町280-716
渥美一弥 〒240-01 神奈川県三浦郡葉山町長柄458
鈴木秀美 〒229 神奈川県相模原市橋本1-3-8-203
中田佳代子 〒221 横浜市神奈川区旭ヶ丘37
高橋 肇 〒013 秋田県横手市横手町六ノ口24-10

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求ください。 入会金 1,000円、年会費 4,000円。
入会申込書請求先： 〒192-03 東京都八王子市南大沢１－１ 東京都立大学 中国文学研究室気付
日本口承文芸学会事務局 (☎0426-77-2145助手室 FAX.0426-77-2150)
送金先：〔郵便振替〕００１８０－４－４４８３４
The Society for Folk-Narrative Research of Japan,
c/o Department of Chinese Language and Literature, Tokyo Metropolitan University,
Minami-Ohsawa 1-1, Hachioji-Shi, Tokyo, 〒192-03, Japan.

口承文芸に関心のある方を広くご紹介ください

☆本号をもって私どもの任期も終了です。会員各位のご協力に感謝致します。〔編集:大島・中村・三浦〕